

平成24年度第1回北区まちづくり協議会全体会
語り部との座談 グループD 三浦講師

重複した言葉遣いや、明らかな言い直しのあったもの、わかりづらい表現などは、整理した上で作成しています。

西村所長

皆さん、お疲れさまです。

私は、このグループの進行を務めさせていただきます新川まちづくりセンターの西村です。どうぞよろしくお願いいたします。

早速、座談に入りたいと思います。初めに、みずからの震災の体験をお話しいただきます語り部の方は、ガイドサークル汐風の三浦さき子さんでございます。

簡単に、三浦さんのプロフィールを紹介させていただきます。

三浦さんは、震災前からレストランを営んでおられました。残念ながら、震災によって、レストランと自宅が流されてしまいました。現在は、仮設住宅にお住まいで、自治会の会長を務められております。今は、集落全体で、高台の方に移転したいということで、地域と行政との調整にご尽力されていると伺っております。

レストランには、看板として、大きな浮き球が飾られていたそうですが、これも残念ながら流されてしまいまして、遠く、アラスカ湾のミドルトン島、初めて聞く名前だと思いますけれども、写真をお持ちいただきました。この大きな浮き球が流されてしまったのですが、今年6月に発見されまして、1年3カ月ぶりに三浦さんのもとに戻ったということです。

現在、この浮き球をシンボルに、レストランを再開していこうということで準備を進めているところと伺っております。

三浦さん、今日はどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、このグループの皆さんの自己紹介をお願いしたいと思います

【自己紹介】

三浦講師

皆さん、どうもこんにちは。南三陸町ガイドサークル汐風の三浦さき子です。

私たちは、東日本大震災で、全国、そして海外の皆さん方から、物資の面におきましても温かい支援をいただきまして、今、少しずつではありますがけれども、前に歩き出しております。

私は、昭和35年のチリ地震津波、そして今度の東日本大震災の津波と、二つの大きな津波を体験しました。チリ地震津波は、小学校6年生のときでしたが、そのチリ地震津波のときの体験から、思いこ



みで、津波とはこういうものだ子どもや孫たちに伝えてきていました。そのせいで、今回の震災では、本当に危ないところで孫を犠牲にしてしまうところでした。

津波というのは、そのとき、そのときで、決まりがないということ強く感じまして、このようにして皆さんの前でお話しさせていただいております。

昭和35年のチリ地震津波は、私がちょうど小学校6年生で、早朝だったのです。祖父が、津波が来るから起きろ、裏山に逃げろということで、起こされたのです。それで、裏山に登って、裏山から海を見たときに、海がものすごく荒れていました。

潮が引いて海の底が見えたとき、海の底は本当に平で、陸と同じなんだ、山あり谷ありなんだということが自分の記憶に残りました。

私たちの集落は、南三陸町戸倉地区の波伝谷というところで、必ず津波の被害があります。今回も、津波が一番高かったところです。

チリ地震津波のときも被害に遭ったのですけれども、そのときは、チリから一昼夜かけて津波が来たので、水の勢いが今回とは全然違っていたのです。だから、波が来て、浸水しても、家が流されるところはほとんどなかったのです。そういうことを自分で思っていたので、津波が来ても、うちは大丈夫だ、家は直して1メートルほど高くしているし、この家に被害があるようだったら、この集落は全部だめになる、まさかそんなことはないだろうという話をしていました。子どもたちも私の話を聞いていたので、そういうふうに思っていたのです。しかし、今回の津波は、小学校のときに体験した津波とはまるで違いました。

私は、食堂と直売所もやっていて、子どもたちは、その日に直売所にいたのです。地震が来たときには、立っていられなくなりました。外を見ますと、車がぼんぼん流されていました。そこには、5人がいたのですけれども、一緒にいた方が、きっと大きな津波が来るから、すぐに家に帰った方がいいと言われ、みんなばらばらに分かれました。私は、家の瓦が重いので、地震で家がつぶれてないかという思いがあって、すぐに家に戻りました。そのときは、家は、地震の被害は何もなかったのです。90歳の母親は動けない状態でしたので、高校2年生の孫と2人で、母親を車に乗せて、私と母親だけが高台にすぐに避難しました。孫には、早く逃げろよと声をかけたのですけれども、一緒に車に乗せなかったのです。

母親を車に乗せて、車から海を見たときに、防災庁舎から、町職員の遠藤未希さんが、6メートル、7メートルの津波が来るから早く逃げるようにと叫ばれていました。

高台から海を見ると、潮はそんなに引いていなかったのです。見る角度で違うとは思いますが、私が見た限りではそんなに引いていませんでした。チリ地震津波のときは、もっと潮が引いていて、それでも津波の高さは5メートルだったのです。それが、大した潮も引いていないのに、6メートル、7メートルと言っているのです、本当にそんな波が来るのかなという思いで海を見ていました。

そうしたら、養殖施設がざっと流れるような感じで民家の方に入っていったのです。その施設は、ホヤとかワカメとかカキとか、いろいろなものをやっているのです。嵐が来ても、海が大荒れになっても、本当は動かないようにつくっている施設なのです。それが、ずっと流れている。それで、あれ、何だろうと思っているうちに、防潮堤のところまで水がいっぱいになって、そこから水がなだれ込んできました。そのときの

音といったら、堤防を壊す音とか、木造の家を壊す音とか、バリバリ、ガリガリと、これはこの世で聞く音なのかと思うぐらい、本当に不気味で、何とも言えない音でした。そのときは、ただ唖然として、何とも言えませんでした。自然の力は恐ろしいと本当に思わされました。

そのうち、一緒に避難していた人が、あれは何だ、流されている家の上にだれか乗っていたぞと言いました。その屋根の上に乗っていたのが孫だったのです。頑丈な家でしたので、壊れることなく流されてきたのです。みんなで水の到達点のところまで下りて、頑張れよと声をかけ続けました。波が引き潮になる前に、数分だけ穏やかになる時間があるのですが、そのときに、孫が水の中に入って泳ぐようにして、いろいろなものを越えて私たちの避難しているところに上ってきてくれました。そのときの孫の様子は、下はパンツ1枚、体は傷だらけでした。私は、危うく自分の孫を犠牲にしてしまうところだったのです。助かってくれて本当にありがたいうという思いでいっぱいでした。集落にあった住宅、約80軒はすべてが流出しました。

私が避難したところに、山小屋みたいなものがあり、そこにはまきストーブとまきがありました。持主はいなかったのですが、その晩は避難した30人ぐらいの人が、そこで過ごしました。

家族がそろって一緒に逃げた人はいませんでした。私のところは7人家族で、私と母と孫、孫のお母さんの4人は同じ所にいたのですが、息子は津波が来る前に、船を助けるためと沖出しをしたまま、4日ほど連絡が取れませんでした。小学校と中学校の孫2人は、それぞれ学校にいました。中学校は、高台にあり避難所にもなっているから大丈夫だろう、小学校は低いところにあるけど大丈夫だろうか、みんな無事に逃げたかなと考えながら一晩を明かしました。携帯電話も通じませんし、周りをみれば真っ暗で、みんな、どこにも連絡できない状態でした。その中では、だれも、おなかですいたとは言いませんでした。まきストーブが使えたので、雪を持ってきて鍋に入れてお湯にし、それをみんなで飲んだという感じでした。次の日、ここにいっても何も食べ物は無いからということで、500メートルほど離れたところにある県の宿泊施設にみんなで行こうということになり、移りました。

小学校は、3月11日の2日前に地震があり、その時点で、ここは津波が来れば危ないところだから避難路の確認をしておいた方がいいということで、先生方で確認を行っていたそうです。そのため、学校にいた生徒はみんな助かっています。中学校は、まさかここまで津波が来ることはないと思っていたのですが、結果として犠牲者を出すことになってしまいました。

宿泊施設では、私たちの地域には契約講（主に東北地方にある村落の集団）というものがあるのですが、その契約講の長ですとか、区長（地区の長）が先に立ち、役割分担を行いました。女性が炊事、男性が食べられるものを探して持ってくるというようなことです。水は裏にある小川からくみ、割りばしも使い捨てはせず、すべて洗って使いました。200人ぐらいが何もなくて過ごしたのです。そのうち、支援でおにぎりが届くようになったのですが、届くまでには固くなってしまっていました。それは、雑炊にして食べました。

自分たちの場所をわかってもらおうとしても、情報を発信する手段が何もないので、校庭に大きくSOSと書いて、自衛隊のヘリコプターに気付いてもらおうとしました。

それで、自衛隊が2日目あたりから、物資を持ってきてくれるようになりました。

その施設でみんなと一緒にいたかったのですが、母親が90歳なので、そこに長くいるのは大変だということで、2次避難で近隣の市町村に移りました。鳴子ホテルというところでしたが、本当に立派なホテルで、おかみさんも従業員の方もとてもいい人でした。普通は、旅行に行ってお風呂に入ると疲れが取れるのですが、何日入っても疲れが取れませんでした。食事もバイキング形式で、すごくよかったです。自分たちだけがこんなおいしいものを食べていいのか、孫たちがどんな生活をしているのかと思うと、何とも言えない気持ちでした。

そのうち、仮設住宅ができてきました。入居は抽選でしたが、南三陸町内だけでなく隣の市や町にも建てる、どここの場所に当たるかわからないと言われました。私たちのところは、集落というくらいの本当に田舎で、あまりよそに出たことのないおばあさんたちが多かったのです。この人たちを、どこになるかもわからない仮設住宅にばらばらに入れて、どうなってしまうんだろうと思いました。そのうち、民有地に仮設住宅を建ててくれるということを知ったので、この人たちをばらばらにすることはできないということで、私が所有するミニ果樹園、ブルーベリーとかキウイ、ウメ、モモなどをいっぱい植えていたところですが、そこに建てて下さいと町の方をお願いしました。それで、今は20世帯が入っています。

生活不活発病とか、引きこもりとか、いろいろなことがありますが、私たちの仮設住宅ではそういうことはなかったです。朝からみんなが声をかけ合って、だれかがいなければ、見に行きます。だから、ボランティアの人たちも、ここはほかの仮設住宅とは違った雰囲気だね、ここに来ると何かほっとするねということをやられます。

仮設住宅に入ってみて大変だと思ったのは、狭いということが一番でした。今は、1Kの部屋に私と母親の2人で入っているのですが、4畳半にベッド置いて、こたつを置くと、休むところも何もありません。隣の部屋は息子たちが3Kで暮らしていますけれども、そこに5人で入っています。高台移転もなかなか決まらなくて、仮設住宅の期間も2年から3年に延びました。今も、候補地すらも決まっていない状態で、自分の家に入れるのは何年先のことになるのかなと思っています。

仮設住宅に入る前は、もう何カ月すれば必ず仮設住宅に入れるよということがあって、気楽なところもあったのですが、いざ仮設住宅に入ってみると、そこから自分の家に入るのは何年先になるのかと思うと、精神的に参ってしまう感じになってしまいます。瓦れきも随分片づいてきましたけれども、いつになったら自分の家に入れるのかなということで、なかなか前に踏み出すこともできません。

私はレストランを平成11年に開業したのですが、レストラン、直売所、加工場、自宅も全部流されてしまいました。レストランは慶明丸といいます。慶はお父さん、明は息子と、それぞれ名前の一文字ずつをとり慶明丸にしたのです。主人が亡くなってから、来年で33回忌になります。私にすると、お父さんが頑張って建ててくれたのをなくしてしまって、本当に申しわけないという気持ちでした。

だから、店先に飾っていた看板の浮き球が5,000キロも離れたアラスカで見つかり、それが返ってきたときは、本当に奇跡だと思いました。お父さんの思いがアラスカまで通じたのかなという思いでした。

今は、浮き球が戻ってきたので、仮設住宅の人たちがみんなでお休むところ、親戚の

人たちが来たときに休めるところを、プレハブの狭い店舗でもいいからやっていきたいというのが私の夢です。それに向かって頑張っていきたいと思っています。

西村所長

三浦さん、ありがとうございました。それでは皆さんに質問をいただきたいと思えます。

会員

きずなのスタートは声かけから始まると一般的に言われています。

今、三浦さんの話を聞いた中では、お互いに声をかけ合って、元気をもらって、そして、きずなをさらに強くしていくということの大切さを、物すごく感じました。

三浦講師

仮設住宅から、三陸町の中心地の志津川に行くまで15分から20分かかります。仮設住宅に入っている人は、高齢者が多く、昼間は若い人たちが仕事に行きますから、残るのは高齢者なのです。そうすると、買い物などがなかなかできず、病院に行くのも大変です。でも、仮設住宅に移動販売車が週に6回くらい来てくれるので、買い物などはすごく助かっています。

会員

地図をいただいています、波伝谷はここですね。地形がとがっているから、津波が相当強いと思うのですが、どのぐらいの津波が来たのですか。

三浦講師

波の伝わる谷と書いて波伝谷です。そこが戸倉地区というところで、約20メートル近くの津波が来ました。戸倉地区が一番高かったのです。

会員

仮設住宅のある高台は、20メートル以上高いところにあるのですか。

三浦講師

30メートルのところ。だから、初めは、まちも、道路もつくれるかどうか分からないと言っていたのですが、お願いしてみました。そうすると、80軒あったところがみんなばらばらになったのでは、地区のコミュニティが保てなくなるから、時間がかかっても建てましょうということになったのです。それで、私たちが全部そろって入ったのは9月の初めです。

会員

そのままだとコミュニティが壊れてしまうから、そこに一緒に行きたいとおっしゃったのは、三浦さんが中心になって交渉されたのですか。

三浦講師

自治会からも、やってくださいということだったので、私が中心になってやりました。

会員

その三浦さんの一言がみんなを救ったという感じですね。

三浦講師

高台で場所が悪いけれども、みんなで助け合って住んでいます。談話室もあるのですけれども、開放されていて女の人たちはそこに行ってお茶会をやっています。

それから、ボランティアで来ていただいた東京の方が結構いるのですけれども、そういう人たちに来ていただいたときは、できるだけ談話室に上がっていただいて、そこでお茶を飲みながら、いろいろな話をしています。私たちは、皆さんに来ていただいたことだけで元気をもらえます。そして、私たちが元気になっている姿を見て、皆さんたちも、東京に帰ったら元気でいてくださいと。

ワカメの時期などですと、来ていただいた方には、朝にとってきて、それを湯通しして、それを冷やして、塩絡みという工程を皆さんに体験していただいています。近くのホテルに泊まっていたら、時間がある人には、都会では体験できないことを体験していただくということでやっています。そういうものがあると、一時的な支援だけではなくて、きずなができていくのかなと思うのです。

ワカメも、皆さんびっくりしています。えっ、ワカメってこうなのか、メカブとワカメは別々だと思っていた。メカブがあって、その茎がワカメで、それは1本なのだよ、そして、昆布がこうなってメカブになるし、あとはワカメとして皆さんのところへ行くと。そういうことを知ってもらおうと、この次は、秋にまたみんなで来ますので、そのときは、ワカメの種づけも手伝わせてくださいと。そして、できれば収穫するときにまた来たいと、そういうつながりにもなっています。

会員

仮設住宅に入っている人たちは、全部顔見知りの人ですか。

三浦講師

同じ集落の人たちですからね。今は、約20世帯が入っています。

会員

新聞などで見ると、仮設住宅の入居は、事務的にどんどん受け付けて割り振っていったというようなことも出ていたのですが、そんなことはなかったのですか。

三浦講師

初めから、私たちの地区のこの人たちが入りますということで、それに合わせて仮設住宅をつくってもらったので、そういうことはないです。

同じ集落の人でも、先に違う仮設住宅が当たって、違うところに入っている人たち

も結構います。でも、月に3回、お茶会があるので、もし来られる人がいたらお茶会に参加してくださいと言っています。ですから、隣のまちに行っている人たちも、それを楽しみにしています。

年をとってくると、余計にそうなのですが、自分のふるさとというか、前に住んでいたところが懐かしいのです。別の仮設住宅もあるのですがけれども、狭いですから、お茶会なんてできないそうです。私たちのところだと、みんながわかっている人なので、そんなことが簡単にできるのかもしれませんが。ここの談話室は、同じ集落の人たちだから、いつでもいいから、来なくなるときは来て、みんなと会ってお茶を飲んで気晴らしをしてくださいということをやっています。

会員

80世帯の集落がきちっとまとまっていることが一番いいことですね。そのことを見越して三浦さんが自分の土地を貸して仮設住宅を建てたということが、よかったのですね。

私も農家なものですから、うちの屯田地区には、昔、130戸ぐらいがいたのですがけれども、その人たちとは今でも交流しています。だから、それぞれ皆さんの思いは強いと思います。

会員

仮設住宅の中に、独居老人はいらっしゃいますか。

三浦講師

ひとり暮らしの人は3人ぐらいいます。

会員

そういう人は、どなたが訪問しているのか、また、集会所に来てもらうのも、どういう形をしているのですか。今、見回りという言葉がすごく叫ばれていますが、どうしているのかなと思ったのです。

三浦講師

社会福祉協議会の方に支援に来ていただいています。1日に1回は来ています。それから、仮設住宅内にも支援の人がいて、入居している人たちに朝と晩に声をかけるようにしています。

会員

それは、昔から交流があったからできるのですよね。

三浦講師

そうですね。声かけなどがなくても、みんなが集まります。

それから、昔から契約講があったので、どちらかというと、区長よりも契約講の方が強かった集落です。それで、まとまっているところもあります。

会員

その中は、みんなお年寄りだけで、子育て中の人などはいないのですか。

三浦講師

小学生はいなくなりました。中学生と高校生はいます。

会員

では、年齢的には高いのですね。

三浦講師

そうですね。

会員

これからのことを一つ聞かせてください。

今のお話を聞いて、地域のコミュニティがしっかりしていて、連携もとれて、いい状態で皆さん頑張っておられる。そして、びっくりしたのは、いただいたパンフレットが、震災前のパンフレットかなと思ったぐらい生き生きとしたパンフレットなのです。皆さん、やる気十分なのです。人がいて、少しずつ売店のようなものができて、これから復興が進もうとしています。現実の問題として、40%の地域が流れてしまいました。今後、そこに家が建つのかどうか、まちができるのかどうか、それを考えたときに、行政と地域との新しいまちづくりというか、どんなまちにしたいとか、どこにつくりたいとか、そういう話し合いが前向きに進んでいると思うのですけれども、そんなことについて、わかることがあれば教えてください。

三浦講師

このようになっているまちですから、ここにはもう家が建てられません。まちの中心がどこに移っていくのかもわかりません。私たちのところもどうなるのかという心配は確かにあります。

会員

そういう絵図面がきちっとある中でお互いに頑張り合えると、物すごく力が出るのですけれども、頑張っていこう、頑張っていこうと言うだけでは、お年寄りもおられるし、なかなか大変です。行政あるいは国の力で皆さんの思いにこたえていくようにならなければならないなと思って聞いていました。

三浦講師

そうですね。この写真とこの写真を比べてみてください。これが震災前です。このように同じ場所から撮っています。これは、個人所有の島で、それが人工海水浴場だったのです。すごくきれいで、にぎわっていたところですが、今はこのように変わっています。

これが、避難所の体育館の写真です。このように、なかなか連絡がとれないので、皆さんが安否確認をしています。まちの高台の体育館の様子です。

これは、3日ほどたってからの写真です。寒かったので、このように暖をとりながら過ごしていました。

会員

まだ雪があったのですね。



三浦講師

雪はありました。あのときは本当に寒かったです。

会員

三浦さんは、きっと震災の前もリーダーであったと思いますけれども、私も今、三百六十数世帯の町内会長をしています。まず、地震が起きたときに、リーダーとしてはどんなことを一番最初にすればいいのかと、すごく感じているのです。町内会でも、今、自主防災組織もつくっていますし、体の不自由な方をどう避難させたらいいかという視点で町内では盛り上がって活動しているところです。ただ、実際には、役員の人たちは、そういうときにどうしたらいいのだろうと、すごく不安なのです。

今のお話を聞いていると、災害が起きた後に、三浦さんは非常にすばらしいことをなさって、きちっと仮設住宅をつくられて、まとまっていらっしゃるのですが、経験のない私たちにとっては、災害が起きたときに、まず、どういう行動をとったらいいのかということをお聞きしたいと思うのです。

三浦講師

実は私も、別に考えてはいなかったのですね。災害がおきたらどうするというのを以前から考えていたわけではなかったのです。

ただ、私たちは、5月24日のチリ津波以来、津波訓練をずっとしてきました。私たちの集落では、犠牲になった人が16名います。実は、小学校で亡くなった児童も私たちの集落です。それから、お年寄りのご夫婦が2人で病院に行って、その帰りに亡くなったという人も結構います。私も、逃げたときは、このような大きな津波が来ると思って逃げたのではないです。とにかく、訓練をしているから、必ずここに避難すると。その後、またすぐに家に戻れるだろうという考えで、何一つ思いつきませんでした。

今回は、津波の勢いがあったので、川を伝ってどこまでも上っていきましたけれども、チリ津波のときは、川があっても被害がなかったのです。ですから、その人たちは、ほとんど訓練をしていなかったと思います。それで、犠牲者は五十数名、家族で5人ぐらい亡くなった人もおります。ですから、やっぱり訓練というのは必要だと思っています。

西村所長

津波の訓練というのは、どういう訓練をするのですか。

三浦講師

防災庁舎から無線が来ます。そのときに、決められた場所に避難します。私たちのところは、80軒ある集落が五つに分かれていて、1区はここ、2区はここ、近いところに逃げます。4区はここ、5区だったらここだということが決められていました。だから、遠くに逃げなくても、その区内の高いところに避難していましたが、そんなに遠くまで避難するわけではないです。

ただ、避難場所に指定されていても、今回の津波は想定外の高さだったので、一回、そこに避難しても、また波に追いかけて、高台に上って、怖い思いをした人たちが結構いました。私たちは、初めから高いところだったので、一回上れば、波に追われるようなことはなかったです。

常の訓練が一番大事で、防災無線で高台に逃げなさいと言われたときに、自然と体がそこに向かっていくという感じでした。やはり、常の訓練が一番だと思います。決まったところがあれば、慌てることなく逃げられます。

会員

やっぱり想定外だったんですね。

三浦講師

想定外です。だれもが思っていませんでした。

私たちの隣の集落も、川を上って、何キロも奥まで全部が流出です。90軒ぐらいあったところが全部流出です。

チリ津波のときは何の被害もなかったところもなくなっています。それで、犠牲者が五十数名出ているところがいっぱいあります。

会員

札幌は真っ平だから、逃げるところがないのですよね。

ビルがあるからまだいいですけどもね。ここまで来ることはないと思いますが、今回の三陸町と同じになるとすれば、石狩から上がったときに、新川が一番やられません。川が真っ直ぐですからね。

会員

屯田も低い地域ですよ。

会員

津波は川を上りますから、低くても流れてくる率は少ないです。

だから、7メートルも8メートルも来たら、北24条まで5分とかからずに来ますよ。

三浦講師

私たちも、チリ津波では川を全然上らなかったので、今回は本当にびっくりしました。

会員

先ほど、おにぎりを雑炊にするという話がありましたね。それは、三浦さんのアイデアですか。

三浦講師

いえ、女の人たちのアイデアです。

会員

集まったら、みんなが協力してやるのですか。

三浦講師

そうです。リーダーはいますけれどもね。

会員

食べ物は、次の日には来たのですか。

三浦講師

3日目ぐらいです。次の日までは、宿泊施設にお米がありましたので、それを食べていました。

会員

私たちが一番心配なのは、寒い時期だと、学校に避難しても、毛布も、食べるものも、全員分なんてありませんよね。そこが心配です。

会員

本日は、本当に貴重なお話をいただきました。

学校現場に勤務している者として、大変な示唆をいただいたと思っております。

また、今回の未曾有の災害に対する地元の方々の大変なご苦労、そしてまた、その方々が希望を失わないすばらしさ、きずなと言うのでしょうか、そういうものを感じました。そして、三浦さんのレストランをまたやろうというお話には、大変感動いたしました。

今、学校の話も出ましたが、中学校はちょっと高台になっているから大丈夫だろうと。小学校の方は備えていたということで、大丈夫だと言われていた中学校で犠牲者が出たというのは、本当につらいことだと思います。そのお話を聞いて、まさかそんなにはないだろうという想定外のことは、災害に限ってはないのだと思います。常に最悪を考えて備えなければならないということを改めて考えさせられました。

最後にお話しされていましたが、学校でも防災訓練をっております。これ

は昔からやっているのですが、緊張感がちょっと失われていたということがあったと思います。特に、北海道はあまり災害がないですから、この数年、今年あたりから、防災教室ということで、消防署の方もかなり力を入れて防災訓練に積極的にかかわっていただいたりしています。実は、今日やっている学校もあるのです。

そういうところで、防災に対する注目が高まってきたというのは大変いいことですが、学校は基本的に避難場所になっております。ただ、おっしゃるように備蓄関係は特定の場所にしかないのです。食料も毛布もなく、ただ避難する場所だけになっているのです。この問題が一つあります。今後、行政で考えていかなければならないのは、設備的なもの、ランプであったり、防寒具であったり、食料もそうですけれども、そういうものをこれから早急に充実させていかないと、場所があっても、そういうものがなければ移動せざるを得ないような状況に追い込まれたり、孤立した場合に大変なことになるのかなと思いました。

そこら辺は、行政に状況を把握していただきたいと思います。

会員

連絡所にはなり得ても、避難所になり得る体制がないですからね。

西村所長

残念ながら、時間になりました。三浦さんには、貴重なお時間をちょうだいいたしまして、どうもありがとうございました。

ぜひレストランが再開できますように我々は応援しております。

どうもありがとうございました。